

グリーン四国

四国森林管理局

高知市丸ノ内 1 丁目 3-30
TEL 088-821-2000
FAX 088-821-4834

ホームページアドレス <http://www.rinya.maff.go.jp/shikoku/>
電子メール shikoku_soumu@rinya.maff.go.jp



四国山の日

No.1086 2010 年 9 月号

森林環境教育サポート講座の開催

指導普及課と四万十川森林環境保全ふれあいセンターは、教育関係者のための森林環境教育研修会を開催しました。【詳細は2頁に掲載】



座学（指導普及課）



間伐体験（指導普及課）



種子の模型飛ばし（ふれあいセンター）



土壌観察中（ふれあいセンター）



九月九日、徳島県庁において第三六回四国林政連絡協議会が開催され、四国各県の林務担当部局、(独)森林総合研究所四国支所、同林木育種センター関西育種場、同森林農地整備センター徳島水源林整備事務所、当森林管理局が参加しました。

開会にあたり当局斎藤計画部長の挨拶及び開催県の徳島県床桜林業飛躍局長の挨拶のあと「四国山の日賞」選考委員会の審議結果を報告し七団体を来たる一〇月一六日「四国山の日」をめぐり「2010」(愛媛県久万高原町)において表彰することを決定しました。

林野庁担当官からは、平成二三年度予算概算要求の説明があり、森林・林業再生プランの中間取りまとめが六月に発表され、新たな

森林・林業の方針が具体化する中で予算編成であり、各県担当者の関心も高く、活発な質疑応答が行われました。

また、各機関から施業の集約化や路網整備をはじめ、重点的に取り組まれている事業の進捗状況及び課題、今後の取組方向が説明されました。

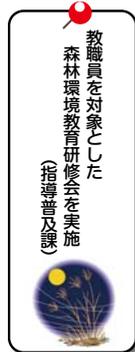
本協議会は、四国の森林・林業行政担当者が集う場であり、香美森林組合の森林・林業再生プランの実践事業の取組状況の報告があるなど、盛んな情報交換が行われました。



四国林政連絡協議会

森林環境教育サポート講座

【第一弾】



八月六日、高知市工石山青少年の家と工石山自然休養林において、教育関係者のための森林環境教育支援講座を開催しました。

この講座は、高知県教育センターと連携し、教職員が、児童・生徒に対する森林環境教育に積極的に取り組むことができるよう、森林・林業に関する知識や技術、指導方法等の習得や体験を通じた講座を実施することで指導者の裾野の拡大を図ることを目的として、平成一九年度から実施しているものです。

今回は、四名の教職員の方が参加し、午前中は、森林・林業の概要や森林環境教育のあり方、工石山につ

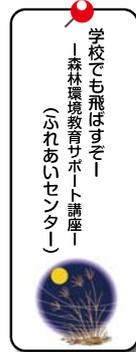
いての座学とネイチャーゲーム、午後から、「県民の森工石山を楽しみながら良くする会」と嶺北森林管理署職員との協力を得て、間伐体験と森林を散策しながら植物の特徴や名前の由来などを勉強しました。

参加した先生は、熱心にメモを取り、子どもたちへの指導を意識した質問や問題点なども出され、関心の高さがうかがえたところであり、今後の森林環境教育への積極的な取組が期待されます。



植物観察

【第二・第三弾】



当センターでは、森林環境教育に関する指導者の裾野の拡大を図ることを目的として、教職員の方々を対象とした研修会を開催しました。

七月二七日には四万十市立津野川小学校に高知県の先生方一八名、また、八月三日には松野町立松野西小学校に愛媛県の先生方一五名が参加されました。

今年の内容は、当センターが教科書補完用に作成した「空飛ぶ種子」「土壌にすむ生物」と「炭焼き体験」「木工クラフト」の四つのプログラムを実践しました。「空飛ぶ種子」では、植物の種子がさまざまな方法で種子を散布することを紹介し、種が飛ぶ様子を実験

する風洞装置でマツやカエデの種子、自分たちで作ったマツの種子の模型が無いと上がると歓声が沸きました。



空飛ぶ種子の模型作成中

そして植物の種子の中で一番大きい翼果を持ち、遠くまで飛散し繁殖すると言われる、熱帯アジアのウリ科の樹木であるアルソミトラの種子の模型を作りました。

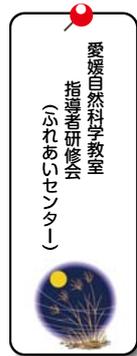
ました。

「土壌にすむ生物」の実習では、約一ヶ月前に校庭に埋めておいた生ゴミなどを掘り起こし、その土の臭いをかいだり、また、顕微鏡で微生物を見つけ普段の生活では見ることない生物に大喜びしていました。

「炭焼き体験」では、折り紙で折った鶴などが炭になることに驚き、また、例年好評の「木工クラフト」では、次々にユニークな作品が完成していました。

実施後のアンケートでは、「二期期に子ども達と一緒に種飛ばしをやってみる」「実際に森林の中に入っての研修もあれば」等の感想や意見がありました。アンケートの結果は、今回の企画に反映させることとしています。

【第四弾】



今治市、松山市、宇和島市で理科好きの現職教員やOB、愛媛総合博物館職員により、小学生を対象とした自然科学に関する教室（愛媛自然科学教室）が開催されています。

当センターでは、その指導者三〇名を対象に、八月九日、四万十市西土佐中央の宿泊体験施設「四万十楽舎」で研修会を開きました。

今回の研修会は、自然科学教室の運営、指導する教員等の指導力を向上させることを目的に、森林再生事業や森林の持つ公益的機能等を説明、樹木の炭素現存量の測定方法についての実技を行いました。

樹木の炭素現存量が、木の重量の約半分であること

や、吸収した二酸化炭素が

その約三・七倍の重量であることを、木片(CO₂のカンヅメ)を使って説明し、直接に重量を量ることのできない立ち木の重量を、地上から一・二メートルの高さの幹の直径(胸高直径)や木の高さ(樹高)から推計する方法を学びます。

実際に四万十楽舎前庭の立ち木を調査し、樹高を測竿や、測高器等を使って、また、胸高直径は輪尺(りんじやく)や直径巻き尺を使って測りました。

受講者は、普段目にすることのない測竿や直径巻き尺、測高器等の使用方法を熱心に聞いていました。

講義終了後、受講者からは「測高器の代わりに巻き尺と分度器を使う方法などは、算数の考え方としてもおもしろい」など、今後の科学教室での参考となった

とご意見をいただきました。



炭素現存量 (座学)



シリーズ

地域の

声

森の出口を探せ！

株式会社 大五木材

代表取締役 高橋照国



街の子供たちに「木はどこにあるか？」と質問すると、ほとんどの子供が「山」とか「森」と答えますが、我々のもっと身近な街中に

も「街路樹と

いう立派な

森がある

よ」と言う

と、怪訝な

顔をする子

供もいます。

彼らにとつて

の「木」は、奥深

い森の中で一〇メートル

二〇メートルもある巨木であつ

て人の手の届かないような

「天然」のものであらねば

ならないようです。街の街

路樹は人工的に植えたもの

というイメージが強いのか

もしれません。しかし、我々

が目にする森のほとんどは

人の手によって植えられた

ものなのです。CO₂を吸

収する働きにしても、むしろ

街路樹の方が車の排気ガ

スを毎日浴びせられるとい

う過酷な環境の中で、より

頑張っているぐらいだと思

うのです。それなのに街路

樹は道路が整備される際に

伐採されると、産業廃棄物

として処分されることにな

ります。その運命をほとん

どの方は意識すらした事も

ないでしょう。気がつく

あつたはずの街路樹がなく

なつて見通しがよくなつて

いる、なんてものです。木々

にはそれぞれに役割があり

ますが、その役割も人間が

勝手に与えたものです。そ

のイメージが強いがあまり、

大切にしなければならぬ

木〓山に在るもの、街路樹

〓景観を整えるもの、のよ

うなイメージが固定してし

まい、街路樹を木とは別の

物のように認識してしまつ

ているのかもしれない。

何が言いたいかという

と、我々も木のイメージを

固定させてしまつてはいな

いかという事です。木は人

間が山に植林したものであ

つたとしても、太陽や雨や

土がなければ生きられない

以上、人間だけの物ではな

く、そこで暮らす鳥や虫達

のものでもあります。当然、

百年も経てば、多くの鳥や

虫の終の棲家として、その

体を提供してきたことでし

よう。体内に虫や穴、傷が

あつても当たり前の事です。

彼らの命の巢を

伐つてしまい、

製材で板に挽い

て、やがてテー

ブルなどに加工

されて、そこに

節や傷のある事

をいかに不運

のように言うの

はどうかと思う

のです。彼らは

何の不満も言わ

ずに享受してき

ているのに人間

ばかりが不満を言います。

それは実に不遜な話です。

木は決して人間のための

建築材や家具材になるため

だけに生まれてきたのでは

ありません。それは人間

が勝手に与えようとしてい

る使命であつて、実は他の

用途ではもっと大切な役割

があつたり、力を発揮する

場面があるのかもしれない

